

ボジションであつた。赤城の夏は、自分が今迄の旅行中、最も嬉しく思つた處で、全山の緑も、此處程落付いた穏かな色は、未だ嘗て見た事がない、八月の中ばであつたが、天氣は非常によく續いた、けれども山上の事であるから、時々綿をちきつた様な雲が出て、午後には到れば、大抵は一帶に曇ると、毎日殆んど決まつて居る様であつた、描いたのは午前である、全面に日の當つた場合も、非常に面白く思つたけれど、前にも云つた通り、始終浮雲が出て、遠景を覆ふたり、又前景を曇らせたり、そうかと思ふと、或一部分へ、日の洩れる場合等、色々様々に變化して、丁度自然か自分に、或物を捉らへさせんとするかの様に思はれた。自分には前景の曇つた場合を、一番面白く感じ、楮筆を執つて見ると、其雄大な感じは、到底視る可くもなく、二度も三度も洗つては描き／＼し、途中で止めて、しまをふかとも思つたが、これ迄に費した時日が、惜まれて煩悶しなからも、描き續けて居る内、稍自分の意を得たる部分が出来たので、面白くなつて來た、そうなると、他の部分で、多少失敗しても、其部分が惜まれて、勢ひ骨を折る様な譯で、どうやら出來上る迄には、丁度八日間を費したのである、それでも、午前中、日の當つて居る時、遠景を描き、午後に至つて、曇つて來れば、前景の影の部分、いぢるといふ、苦しい策を講じた事も、三四回あつた様に覺えて居る、而し繪の製作其物は、兎に角、山頂たの靜かな水を湛へた池の畔りに、たま／＼通ふ馬子歌の、山に反響する聲を聞きながら、靜かに繪筆を執る時は、あらゆる

る浮世の欲望も、打忘れて、全く自然に魁せられた、無我の境の人となつて、斯の道を研究しつゝある自分の境遇を、限りなく嬉しく、満足に思つたのであつた、物質に捉はれたる世の人皆は、恐らく此絶大の幸を知る事は、出來ないであるふ。

### 日比谷の午後について 後藤 工志

日比谷の午後について、何か感想を書けとのお話でムりました、が、感想をかく程の大したものでもありませんし、それに、又、深いかんがへがあつて描いたわけでもありませんので、おことわり申しましたが、是非に、この事でしたが、何か少し書いて見ようと存じます。

一體、私には、眼に見える總ての物から美を感受して、たゞちにそれをカンバスに歌うと云ふ様な事は出來ません。否、私の感覺はそれ程、鋭敏ではないのです。私の脳裏には常に私の憧憬してやまない何に物かが潜んで居ります。私はその憧憬して居る何に物か、いはゞ私の理想に適した處を選んで描いて居るのです。私の現在はその満足して居ります、——たとへ未來は思想の變換と共に盛んななローマンチツクなものを描くか、又はアンプレツシヨニストになるか何に成るかわかりませんが、——日比谷の午後には、私の理想のある一部にあてはまつて居る處だと思つて下さればよいのです。

昨年の夏、ふと日比谷へ遊びに行きました。それは丁度、よく晴れた最夏の午後でしたから、總ては、ぎら／＼とかぢやき、

蟬はぢん／＼なき立て、蜻蛉は楽しそうに、飛びまわつて居りました。阿屋は強い影を堤にながて、藤棚の下には散策の人々がごちゃ／＼と休息して居ります。其の中には懐しい赤い日傘も目受けられました。猫の毛の様にふさ／＼した一面の草原は、暑つい、いきりをぼつ／＼と吐き出して居る様で、もち竿を持つた小供が、そこ此處に、蜻蛉や蟬を、追ひまはして居ります。私は此の暑くるしくも、又、長閑なる光景に暫らく見とれて居りました。

翌日から其處へ晝架を据えました。極めて、呑氣に描いて見たいと思つて居りましたが、技巧の幼稚なのは仕方のないもので、とうとう、目茶目茶にこれ上げてしまいました。それでも十日ばかりは通つたでしょう。常識的な私には、やはり常識的な色しきや、見出せませんでした。

この様な、理想的の自然を眼前に控へて、大なる感興を以てやり始めながら、やつぱり努力主義一方の、つべたい繪にしまつたのは誠に慚愧の至りでムリです。(二月十六日)

## 新年會雜報

美津 廼家主人

本年は、前の水彩畫講習所が、日本水彩畫會と改稱せられて、専門の研究所となつてから、丁度五週年に相當するので、大々的紀念會を開かふといふ事は、大下先生御在世中、早く既に計

畫されて居つた事であつたが、不幸にして突如、不歸の客となられたので、豫定の計畫も、余程縮小し、只研究所だけで、内々に開かふといふ事になつた。けれども、餘興の有志連は、非常に熱心なもので、昨年暮の内より、早くも支度に取掛つて、劇の番組も、それ／＼決定されて、練習に着手した様であつたが、年が明けてからは、尙一層盛んに練習して、當日の到るを鶴首して待つて居る、仕末であつた。今日は其當日に成つたのである、月次會は延はした方が、よからふといふので、明日一所に開く事にして、午後一時より、新年會を開くといふ觸れ出しであつたが、開會前より、非常に多くの來會者で、余り廣くもない研究所は、到る處人で以て埋められて居る、會場なる二階の昇降口には「開會前二階に昇るべからず」といふ物々しい張札があつた、二階では、まだ頻りに小聲で試演をして居るらしい様子であつた、餘興の支度の都合で開會は、少し後れて、午後二時半といふに、一同を會場へ導いたが、忽ちにして一寸の空虚もなきまでに、満ちてしまつた、先生側には磯部、戸張、岡、大橋、永地、眞野、藤島の諸先生及大下正男君も、竹内久子氏と共に見へた、來賓の中には大洋畫會の茨木猪之吉氏、例の不折式の容顔いかめしく、座に就けるが、著しく目に立つた、僕が開會の辭を述べて、直に余興に移る、一同に渡つたプログラムは、亦非常にハイカラで、時代の新風潮を汲む連中が、頻りに骨を折つた思考だけあつて、随分凝つたものだ、全頁殆んど英文でハーモニカ獨奏、及合奏、喜劇、正劇、夢幻劇、ダ